

子どもが主語の教育を考える学習会

事業責任者： 清川亨（連合教職開発研究科・教授）

概 要
<p>文部科学省が現在進めている「令和の日本型学校教育」では、「児童生徒が主語」であることが強く言われており、県内各学校においても令和の日本型学校教育への転換を図ろうとしているところである。しかし、実態としてはまだまだ教員が主語の学校教育が行われており、児童生徒が主語の学校教育はなかなか浸透していないのが現状である。</p> <p>そこで、本県においても令和の日本型学校教育が浸透するよう、すでに児童生徒が主語の学校づくりを進め、全国でも注目を集める学校長経験者を講師に招き、講演や意見交換等をする中で、参加者の子どもを主語にした学校教育に対する理解を深めるための学習会を開催することとした。</p>
関連キーワード
令和の日本型学校教育、子どもが主語、校則撤廃、自己肯定感、不登校抑止

事業の背景および目的

学校が学習指導のみならず、生徒指導の面でも主要な役割を担い、児童生徒の状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子どもたちの知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」は、諸外国から高い評価を受けてきた。しかし、現在は Society5.0 の時代となりなり、コロナ禍など予測困難で、社会全体がデジタル化・オンライン化、DX 加速の必要性が増すなど、時代は急激に変化している。その中で児童生徒に育むべき資質・能力は、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要とされている。そのため、これまでの「正解主義」や「同調圧力」への偏りからの脱却し、一人一人の子供を主語にする学校教育の実現が強く求められている。

ところが、現在の子どもに接する教師や保護者は、その殆どが教員が主語の学校教育を受けて来たため、子どもが主語の学校教育の具体的なイメージを持つことができず、従来の教育から抜け出すことが出来ずにいる。学校において令和の日本型学校教育への転換がなかなか進まないのもこのためである。

そこで、すでに児童生徒が主語の学校づくりを進め全国でも注目を集める学校長経験者に直に話を聞いたり意見交換等をする中で、参加者が子どもが主語の学校教育の具体的なイメージを持つことで、それぞれの立場で子どもが主語の学校教育に向けた行動を起こす点となり、いずれそれが線、面となることで、本県の児童生徒が子どもが主語の学校教育を受けられるようになることを目指すこととした。

事業の内容および成果

学習会を令和5年11月3日(金)14時～16時半に福井県立高志高等学校学習室を会場に、東京都世田谷区桜丘中学校前校長 西郷孝彦氏を講師に迎え、保護者や現職教員等72名が参加し、「子供が主語の教育を考える」を主題として、講演と講師との意見交換を行った。

講演では校長として一人ひとりの生徒が苦しむ学校の枠取り払おうと校則廃止や定期考査廃止など、生徒に対する枠を取り払うあるいは取り除くことを進めたことなど事例を挙げながら、生徒が主語の学校とはどういうことなのかを具体的に話された。意見交換では成績は大丈夫なのかなどの質問が参加者から出たが、主語を生徒にすることで生徒が主体的になり結果として成績は向上したことなどが伝えられ、参加者は生徒を主語にすることへの理解が深まるものとなった。

学習会後に実施したアンケートには41名から回答があり、満足度は図のようであった。また、「同調圧力がかかる枠を取り外した学校生活でこそ子どもの積極性が増し卒業後も自ら物事に取組む姿勢が身につくことが分かった。」「幸せを一番に考える教育、ユニバーサル教育の大切さが分かりました。」「保護者として教育に対する考え方を変えていく必要があると感じました。」「今日は学校でどんなこと習ったの?と声を掛けていましたが、学校にいてどんなことを思ったのか、感じたのかなどを聞いていこうと思いました。」「生徒の幸福の実感を一人ひとりの特性に応じて支援して行くことが大切であると改めて考えさせられました。」等の理解が深まったことが分かるコメントがあった。今後それぞれの立場で、子どもを主語にした学校教育に向けた行動を起こすことを期待したい。

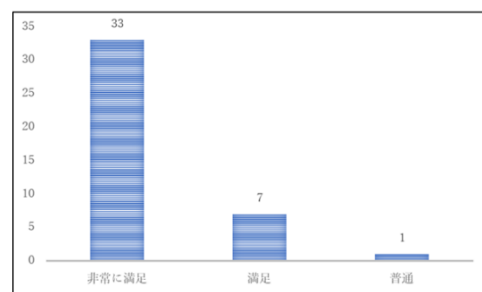


図1 学習会の満足度

参考文献・添付資料および特記事項等

特記事項等は特になし。

事業名称:子どもが主語の教育を考える学習会

事業責任者: 清川 亨 (連合教職開発研究科・教授)

令和の日本型学校教育の姿

★全ての生徒たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びが実現されている。

- ★一人一人の子供を主題にする学校教育が実現されている。
- 一定の目標を全ての生徒が達成することを指し、異なる方法等で学習を進める学習者視点の「個別最適な学び」が行われている。
- (なお、個に応じた指導は、教師視点であり教師が主語といえる。)
- ・異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す「協働的な学び」が行われている。
- ★教師は、子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たし、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている

雲を抜けることができた学校の要因例

- 子どもたち一人ひとりの安全安心がまず大事だという原点に戻った。そして通うのが楽しい学校づくりから始めた。
- 子どもたちが自ら課題をみつめて解決する学習を進める中で、教師が指導から支援への姿勢に転換した。
- 子どもが主語の教育を進める教員が関わる子どもたちの変容に気づいた周囲の教員に、波紋のように広がっていった。等

雲を抜けるきっかけ

転換を阻む雲がかかっている

令和の日本型学校教育への転換を阻む要因例

- 校長や教師が「令和の日本型学校教育」を頭で理解しても、具体的なイメージがないために転換への舵を切れない。
- 生徒を主語にした学校教育にした時のテストの成績が心配で転換できない。
- 皆同じように、同じことを、同じやり方で、同じペースですることである程度の成果は出ているために、今のやり方を変える必要性を感じていない。
- 保護者も今までの教育から変わることが不安であり、自分たちが子供の時に受けてきた皆同じ反復練習課題が与えられる教育を求め、学校が転換しようとしたときの成績が心配だと反対する。等

従来の日本型学校教育を実施する学校

- ◇成果
 - 国際的にトップクラスの学力
 - 学力の地域差の縮小
 - 規範意識・道徳心の高さ
- ◇今日の学校教育が直面している課題
 - 子供たちの多様化と「正解主義」や「同調圧力」により苦しむ子供たちの増加
 - 生徒の学習意欲の低下
 - 情報化への対応の遅れ
 - 少子化・人口減少の影響
 - 教師の長時間労働 等

子どもが主語の教育を考える学習会

学習会の目的

児童生徒が主語の学校づくりを進め、全国でも注目を集める学校長経験者に直に話を聞いたり意見交換等をする中で、参加者が子どもが主語の学校教育の具体的なイメージを持つことで、それぞれの立場で子どもが主語の学校教育に向けた行動を起こす点となり、いずれそれが線、面となることで、本県の児童生徒が子どもが主語の学校教育を受けられるようになることを目指すこととした。

学習会の実施状況

- 開催期日: 令和5年11月3日(金) 14時~16時半
- 開催会場: 福井県立高志高等学校 学習室
- 参加人数: 保護者(65名)、現職教員(4名)、福井県教育庁職員(1人)、企業(2人) 計(72人)
- 講師: 東京都世田谷区桜丘中学校前校長 西郷孝彦氏
講演題:「子供が主語の教育を考える」

○学習会状況

- 最初に講師による講演を行った。校長として一人ひとりの生徒が苦しむ学校の粹取り払おうと、校則廃止や定期考査廃止など生徒に対する粹を取り払うあるいは取り除くことを進めたことなど、生徒が主語の学校とはどういふことなのかを話された。
- その後参加者と講師との意見交換を行った。
- 意見交換では参加者から成績は大丈夫なのかなどの質問が出たが、生徒を主語にすることで生徒が主体的になり結果として成績は向上したことなど、生徒を主語にすることへの理解が深まるものとなった。

■実施後のアンケート結果

41名から回答があった。満足度は「非常に満足」33名、「満足7名」、「普通」1名と満足度は97.6%と高かった。また、はめられた粹を取り外した学校生活でこそ子どもの積極性が増し、卒業後も自ら物事に取組む姿勢が身につくことが分かった等、子どもを主語にするとはどういふことを具体的に考える契機になったことが分かるコメントが多くあった。今後、それぞれの立場で令和の日本型学校教育への転換に向けた発信など行動を起こすことを期待したい。

<参考> アンケートの主なコメント(コメント冒頭の保は保護者、管は学校管理職、教は教員、他はそれ以外を表す)

- ・保: 私自身は県外から福井県に来ていて、福井県の音ながらの体質というか、ガチガチに固められたものに違和感を覚えています。もっとはやく西郷先生のお話を聞いていたら、私自身の考え方も違って本人たちの自由を尊重した子育てができたかなと、反省と後悔をしながら聞いていました。
- ・保: 福井県の校則は、性別をはっきり区別するランとセーラー服という制服や、スマホについて(通学時は災害時や緊急時に備えて持って行っていいのに、知らない土地にいき研修旅行のときは持つて行くのはダメ)など利用すれば便利で安全なのに、時代に合わない校則や、なぜあるのか根拠のはっきりしないものがあるので、子ども、子どもを信頼して校則をかえたりなくしたりして欲しいと思いました。
- ・保: 私は今の教育と私たちが受けた教育、時代背景が全く違う。真逆ではないかと常日頃から感じていてそこに戸惑いがあり日々悶々としています。それは現場の先生たちも同じだと思うんです。生産性・効率・結果がすべて、スピードと正確さを求められる。他人との比較、丸パツ教育、先生からの一方的な教え、知識詰め込み、集団行動、協調性重視、はみだすことが許されない、おしゃべり無駄口禁止、自分がどうしたいではなく何を求められているというところがある。自分はこうしたいと言うのはわがままとされる。日本が自殺率が高いのは当然かもしれない。ただ、やはり親の私たちがずんなりと受け入れることができないというのが現実です。そして子どものやりたいことをやらせてあげる。サポートする。頭では「そう! そのとおりだ!」と思うのですが、現実難しいです。その理由は私たちはそんな教育は受けなかった。いつもそこにとどり着いてしまふんです。教育にしる子育てにしる自分がされたことをそのまま無意識でしてしまうことが多いと思います。でもまずは「子どもが話しかけてきたときに手をとめる」まずはこれができるよう努めてみようと思います。
- ・保: 親の目線から見た学校は、子どもの事を考えていないよね?と思うことばかりだ。子どもたちが笑顔じゃない理由は、先生方が笑っていらっやらないからだ私は考えます。私たち親は、子どもたちがストレスなく通える学校を望んでいます。いまだ一度、子ども達の声をよく聞き、どんな学校が好きなのか、どんなことに不満や不安を感じているのか、どうすればそのギャップを埋められるのか、先生方と子ども達の目線を作って頂きたいと感じました。そして先生方には、もっと個性を爆発させて、子ども達に多大なる刺激を与えてやってほしいです。先生方が生き生きとしている学校になるよう、応援したいです。まずは校則なしウィークを1週間実施して頂きたいです。色々なマイノリティに気づいていくよい機会になると思います。
- ・保: 制服、チャーム、マイノリティ等、福井の学校は見直されるのか。今回の内容が発信、提案されると良いなと思いました。
- ・管: 全ての子が、学校に来ること・敷居を感じない学校づくりを目指していきたいと思っています。
- ・管: 福井県の教育はよく言えば真面目に先進の実績を継承しています。しかし、同時に社会の変化に対する変容が一步遅れている点を感じています。現在高校教育は急激に変わろうとしています。義務制の公立小中の変容の遅れにジレンマを感じている毎日です。現任校において「一斉テストの廃止」「意味のない校則の撤廃」「遅刻や休みを許容する学級・学校風土」等、子どもにとって利益のあることを優先し実践してきました。今後「ゆうゆうタイム」まではいりませんが、子どもが相談相手を選べる教育相談週間を実施する予定です。
- ・教: 現在、校則や制服をどうするかを検討していますが、なかなかスッキリと進まないのが現状です。そのような中で、本日のお話を伺い、何を議論の中心にしなければならぬかということに気づくことができました。
- ・教: 生徒主体で決めたルールに変えていきたいと考えております。そこで、議論になるのが、「自由と自律」です。今回お聞きしたお話も参考にして、通うのが楽しい学校づくりを管理職や同僚と進めていきたいです。
- ・教: 全ての子が学校で幸せだと願うのは教員として然るべきことと思いますが、実際は既定の枠やこうあるべきという思いの中で運営し、枠に入れない子を置き去りにしているのが現実かと思うます。発想を豊かに、課題意識をもって日々勉強していきたいです。
- ・他: 福井の小中学校では、担任に書き障書の相談をしても、「他の子の目があるから一人だけ特別扱いできない」と、日々ものすごい時間がかかる漢字の宿題を強要し、タブレットを自由に使うことも許してもらえないと聞いています。本が好きで読書量はすごい子です。先生が書くことを強いて「できない子」というレッテルを貼ることが差別なのじゃないかと思ってしまう。別の学校でも、絵や図がある本が好きで、もししても読み障書なのではと思った子がいたのですが、担任の先生が「読まない子」というような発言をしているのを耳にしたことがありました。算数障書のことを知らない先生もいます。福井は保守的なので自ら変革を提案できる先生は少ないと思います。越境入学も難しいので、教育委員会や県が動いて変わることを望んでいます。

